

青丘文庫研究会 月報

No.298
2021年6月5日

青丘文庫研究会 〒657-0051 神戸市灘区八幡町 4-9-22 (公財)神戸学生青年センター内
TEL 078-891-3018 FAX 078-891-3019 <https://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
(※神戸学生青年センターは2021年5月に上記に移転しました)
①在日朝鮮人運動史研究会関西西部会 (代表・飛田雄一)
②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>
年間購読料3000円。在日朝鮮人史研究関西西部会会費、5000円/年 (雑誌3冊を入手できます。)

<巻頭エッセイ>

李南順さんのこと:在日一世のインタビュー・メモから

石川亮太

李南順さんには2年前からインタビューのお相手をしていただいている。お話を伺ってきたなかで、印象深かったエピソードをいくつか紹介したい。

李南順さんは1926年、全羅南道務安郡の一老面で生まれた。港町の木浦から10キロほど離れた上新基里(サンシギリ)という村である。木浦で学校に通ったお父さんは、李南順さんが物心ついた頃には大阪に渡っていて、珍しいお土産を持って時どき帰って来たことを覚えている。その後、お母さんもお父さんの後を追って大阪に行ってしまう、長女の李南順さんと、2歳下の妹さんだけがお祖父さんの家に預けられた。李南順さんが大阪に来たのは9歳の時で、お祖父さんが大阪に行くという夫婦にお金を渡し、李南順さんと妹さんを連れて行ってくれるよう頼んだ。ところが乗船すると夫婦は姿をくらましてしまい、李南順さん姉妹は二人だけで一番安い客室に押し込まれ、船底の窓の外に色々な魚が泳いでるのを、泣きながら見とれていたという。

故郷の友だちはみんな、李南順さんたちが大阪に行くのを羨ましがってくれた。しかし着いてみると飯場の中二階のような部屋で、あてが外れた李南順さんは、もう帰りたい、とだだをこねたという。その後、猪飼野にどんどん建っていた新築の建売住宅に移り、お父さんは材木会社で働くようになった。お父さんは夕方になると、職場の大きな自転車を借りてきて、李南順さんに乗り方を教えてくれたという。女性が自転車に乗るのは珍しい頃で、お母さんは反対したというが、自転車に乗れるようになったことで動ける範囲が広がったことに、李南順さんは今でも感謝している。

李南順さんに最初に日本語を教えてくれたのもお父さんだった。「トウフ」と書いた紙を握らせて朝のお使いに送り出し、トウフくださいと言いなさい、と教える。その代わりに、家に帰ったら韓国語だけを使うように。こうして鍛えてくれたおかげで、今でも日本語がちょこっと上手やと言われますねん、と笑う。優しくあったお父さんの思い出はほかにも尽きない。毎日買ってくるどぶろくをちょっぴり飲ませてくれたこと。お母さんに内緒で一条通の店屋に連れ出し、色とりどりの化粧品を買ってくれたこと。李南順さんの髪を毎朝、裏編みで三つ編みにしてくれたこと、等々。

李南順さんが故郷の隣り村出身の鄭達祚さんと結婚したのは戦争の終わる前の年、1944年の12月24日である。クリスマス・イブなら空襲はないという噂だった。李南順さんの家で親戚を集めてささやかな式を挙げ、翌日、やはり猪飼野にあった婚家に移る。伝統的な結婚式なら、新婦は美しく飾った駕籠に乗って行くのだが、そんな準備があるはずもない。目の鼻の先だ、歩いて行かせればいいという親たちの相談を、李南順さんが寂しく思いながら聞いていると、鄭達祚さんがふと家を出ていった。どこに行ったのだろうと思っているうちに、今里車庫でタクシーを借りてきたという。タクシーに乗りこみ、寺田町から天王寺まで、ぐるっと大回りしながら二人で街を眺めた。李南順さんは今でもこの時のことを思い出すと、あんたカシコイ人やなあ、と鄭達祚さんの写真に話しかける。

鄭達祚さんは腕のよいミシン職人で、カバンをつくっていた。しかし戦中戦後のことで材料が手に入らない。入荷するたびに大阪港に受け取りに行き、使ってしまうと、しばらく仕事はない。済州島のおばちゃんに作ってもらった蒸しパンを天王寺駅で勤め人に売ったり、ゴム靴を仕入れて売りにいったり、李南順さんも色々な仕事をした。当時でいうヤミである。そうしなければ生活のできない時代だった。主人は心配したけど、わた

し、いっぺんも捕まったことはありませんねんで、と李南順さんは笑う。

ランドセルや医者や往診カバンなど、色々なカバンを作ったが、ようやく一息ついたのは、東京オリンピックでポストンバッグがブームになってからのことだ。親方が持っていた仕事場兼住居を譲ってもらって、住み込みの職人さんにも何人か迎えた。韓国人どうしの伝手をたどって、九州や広島からも若い人がきた。李南順さんは職人さんにも家族と同じご飯を食べさせた。中学を出てきた男の子に目玉焼きを出してやったら、「おぼちゃん、これ、本当に食べていいの？」と目を丸くして何度も尋ねたという。

高度成長期の生野では若い働き手は奪い合い、李南順さんのところの職人が他に引き抜かれ、そこが合わないとなると、また戻ってくるというようなこともあった。やがてそれぞれ、猪飼野で独り立ちの職人になったり、実家に戻って商売を始めたりして巣立っていった。なかには北朝鮮に帰ったきり、音信が途絶えてしまった人もいた。

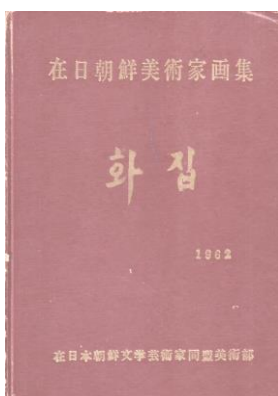
自宅の二階が仕事場で、ハサミとミシンを使うのは鄭達祚さんの役目、李南順さんはベルトに穴をあける係だった。コーチ板と呼ぶ台に革を載せ、ポンチを持ってダン、ダン、ダンと穴を開けていく。目分量でやっても間隔を外したことがないというのが李南順さんの自慢である。あまりに手早くて適当に見えたのか、引き取りにきた元請けのお兄さんが、「奥さん、それで合うてますの？」と聞いてきたことがある。こんな目つぶってでもできるわ、ウソと思うなら重ねて見てごらんといって何枚か手渡すと、ほんまや、向こうが見えますわ、といって驚いたという。鄭達祚さんはいつも、穴あけのための型紙をつくってくれたが、李南順さんは、そんなまだるっこしいアホなこと、と思いつつ、鄭達祚さんに分からないようにほかにしてしまっていたという。

それでも、カバンづくりのような仕事はめんど臭くて大嫌いだった、と李南順さんは言う。李南順さんは結婚する前の戦争中、挺身隊に行かなくても済むからと言われて、飛行機の部品を作っている近所の工場に入れてもらい、鉄板を型で抜く機械を動かしていた。そういう仕事のほうが派手で好きだったのに、と言う。李南順さんはこの仕事で指の先っぽを一つ落としていて、今でも寒くなると痛むことがある。

李南順さんは2男2女をもうけたが、それぞれに仕事を見つけ、カバン作りを継ぐ人はいなかった。鄭達祚さんも20年ほど前に亡くなり、仕事場はたたむことになった。近隣の町工場もほとんどなくなってしまった。今の生野は眠っている、と李南順さんは言う。それでも、子どもが誰か仕事を継いでくれたら、と思うことがあるし、自分ももう少し働いてみたいような気がする。あつこのカバン屋で人を探しているみたいだけど、わたしではあかんかなあ、けっこうできると思うで、と話す。

コロナが終わったら、李南順さんのお話をまた伺いに行くつもりだ。

在日朝鮮人史運動史研究会関西支部会・第417回例会 「在日朝鮮人美術史——1950年代を中心に」白凜



こんにちは。在日朝鮮人美術史を研究している白凜（ペク・ルン）です。2021年4月11日に青丘文庫研究会で発表しました。この文章ではその発表内容を整理します。※発表後の議論の時間に、神戸の朝鮮学校で美術教員として教えていた青山武美さん（1907-1980）に関する情報をいただけてとても嬉しかったです。

発表内容に加えて在日朝鮮人美術家たちと韓哲曦さんとの関わりについて書きます。これについては当日発表の中でお話する予定だったのですが、完全に失念しておりました。文末にまとめておきますので、ご意見や情報をお寄せいただければ幸いです。

なお、博士論文（2020年3月、東大大学院に提出）をリライトした書籍『在日朝鮮人美術史 1945-1962——美術家たちの表現活動の記録』がまもなく出版されます（明石書店、税込 5,280円）。先日の発表内容をまとめるこの文章は、同書の概要にもなります。手に取っていただけたら嬉しいです。

まず『在日朝鮮美術家画集』（1962年1月発行、写真参照）をご紹介します。

在日朝鮮人の美術史を研究するにあたってもっとも重要な資料がこの画集です。美術作品65点の写真が収録されています。このほか発行に際して送られた祝辞（民族団体からのものや日本人評論家からのもの）や、この画集に作品を提供した在日朝鮮人美術家たちの住所録、美術家たちの活動の略史（植民地支配からの解放以降、同画集発行までの活動記録）などが収録されています。

この画集から読み取れることは以下の2点です。

- ①在日朝鮮人美術家が集団的に活動していたということ。
- ②日本人美術家や批評家たちと何らかの関係を築いていたということ。

この2点を具体的に確認するために次の作業をしてきました。

- A. 作品の所在確認（できるだけ直接見る）
- B. 聞き取り調査
- C. 文字資料を収集

以下にA～Cについて具体的に書きます。

- A. 作品の所在確認：宮城県美術館と国立近代美術館（東京竹橋）に曹良奎さん（1926- ）の作品があります。在日韓人歴史資料館には呉林俊さん（1926-73）の作品が、朝鮮大学校（東京小平）に白玲さん（1926-97）や金熙麗さん（1926-2007）たちの作品があります。後者は2016年に有志とともに立ち上げた一般社団法人在日コリアン美術作品保存協会（略称：ZAHPA）に概ね所蔵先を移行しました（『ZAHPA 通信』第1号、2019年7月発行）。このほか朝鮮民主主義人民共和国の朝鮮美術博物館（平壤）、大韓民国の光州市立美術館（全羅南道光州）の所蔵作品も現地で確認しました。
- B. 聞き取り調査：聞き取り調査は約60回になり、東京の韓東輝さん（1935-2020）、許堦さん（1929-2011）、琴静恵さん（今野静恵、1928- ）、京都の河相詰さん（1937- ）、兵庫の鄭光均さん（1945- ）たちに聞き取りをしました。美術家ご自身の来歴と作品にまつわるエピソードを聞きました。
- C. 文字資料を収集：日本青年美術家連合の機関誌『今日の美術』（創刊は1953年）、後述する在日朝鮮美術会の機関誌『朝鮮美術』などがありました。後者には解題を付けました。

以上のような調査を通して分かったことは以下の通りです（上記の①と②に対応させながら記述します）。

- ①在日朝鮮人美術家が集団的に活動していたということ。
 - ・美術団体：1947年に在日朝鮮人美術家協会、1953年に在日朝鮮美術会、1959年に在日文学芸術家同盟美術部を結成して活動していた。
 - ・展覧会への出品：日本アンデパンダン展（日本美術会主催）に1950年代から出品していた。
 - ・展覧会の開催：巡回展（1956年）、日朝友好展（1960年）、連立展（1961年）を開催（あるいは共催）している。
- ②日本人美術家や批評家たちと何らかの関係を築いていたということ。
 - ・上記の日本アンデパンダン展で知り合った日本人美術家たちと日朝友好展を開催していた。
 - ・箕田源二郎さん（美術家、1918-2000）や松谷彊さん（美術評論家、1908-1987）などとの交流があった。など具体的な内容が明らかになりました。これに加えて、
- ③テーマを設定して作品を描いていたことも分かりました。テーマは「在日朝鮮人の生活」、「帰国」（1959年に始まる共和国への帰国を巡ることから）、「南朝鮮の救国闘争」（1960年の4・19革命のこと）の3つです。このテーマ設定は「民族美術の創造」を巡る議論が元になっているものと私は思っています。

このような活動内容を調査しながら思ったことは、在日朝鮮人の美術研究史研究がなぜこれほどまでに遅れているのだろうかということでした。それは意図的ではないにせよ、存在の重さ／軽さが、マジョリティの側から測られてきたからであり、結果として忘却のプロセスに投げ込まれてきたからではないだろうか。しかし歴史は選ばれし者たちだけの歩みではない。忘却の流れに抵抗し、伝承と記述を待っているパズルのピースを沈黙から語りへと拾い出す——この作業は美術史研究の範囲に収まらない課題だろうと結論づけました。

さて、最後に在日朝鮮人美術家たちと韓哲曦さんについて簡潔にまとめます。金昌徳さん（1910-1983）が書いた「素晴らしい成果 8・15 解放 15 周年記念美術展をみて」（機関誌『朝鮮美術』第7号、1961年5月15日発行）に韓哲曦さんの名前が次のように出てきます。「1960年に、祖国解放 15 周年の展覧会を開催した。その際、帰国事業と、南朝鮮の人民闘争は我々の創作意欲を刺激した。総連と韓哲曦氏の援助もあり制作は順調だった」（筆者が要約）。

また上記の『在日朝鮮美術家画集』の巻末に画集刊行協力者名簿があり、ここに韓哲曦さんの名前があります。さらに編集後記に「この画集を刊行にすにあたり、呉徳氏、韓哲曦氏、姜大成氏、金漢述氏を始めとし

て多くの同胞有志の暖かい励ましと協力を受けた。この協力なしに、画集の刊行は困難であった。改めてお礼を申し上げます」(筆者が読みやすいように改めた部分がある)ともあります。韓哲曦さんのご著書『人生は七転八起：私の在日七〇年』にご自身が美術に関心を持っていらっしやったことが綴られており、在日朝鮮人美術家たちとの間にどのようなことがあったのかを知りたいと思っております。情報をお寄せいただければ幸いです。

<青丘文庫研究会の記録> 月報が2020年10月以来の発行となってしまいました。この間、メールニュースを発行していました。メールニュース希望の方は、飛田雄一 hida@ksyc.jp までメールをお願いします。以下、のちのちの青丘文庫研究会歴史のために記録を掲載しておきます。

<2020年>10月11日(日) 在日411回(藤永壮「朝鮮高校「無償化」裁判文書を通じて見た日本国家の民族教育認識」、午後3時半～近現代史(斎藤正樹「シベリア抑留朝鮮人日本軍兵士」) / 11月8日(日)、在日第412回、映画上映会(学生センター) / 12月13日(日) 在日413回、(姜健栄「牛頭天王信仰と明治政府の神仏分離令」、近現代史午後3時半～(玄善允「写真集『写真で見る済州の歴史』全2巻を通して、済州の現代史を概観する」)

<2021年>1月10日(日)、在日414回①上田文夫「戦後電源開発と朝鮮人労働者～国鉄土幌線付替工事を事例に～」、②午後3時半～塚崎昌之「大阪空襲と朝鮮人」、近現代史(休み) / 2月14日(日) <ZOOM開催>、在日415回、在日(廣瀬陽一「日米安全保障条約と日韓議定書——中野重治における朝鮮認識の転換の起点」、近現代史(勝村誠「安重根の東洋平和構想に関する一考察——獄中口述記録「聴取書」をめぐる研究動向を中心に」) / 3月14日(日)、在日416回、高木伸夫「一九二九年林製粉所争議・『日鮮中正会』結成と住吉水平社」、近現代史(仲村修「木浦の涙」の作詞者文一石について) / 4月11日(日)、在日417回(白凜「在日朝鮮人美術史——1950年代を中心に」、現代史(朴泓弘「アジア太平洋戦争期における海軍飛行予科練習生(予科練)の体験について」) / 5月9日(日)、在日418回(①「レイシャルハラスメント：概念の輸入から現状まで」、②高野昭雄、「近代京都の都市開発と在日朝鮮人——七本松通・御前通を中心に——」、近現代史(休み)

●青丘文庫研究会●2021年6月13日(日)

■在日朝鮮人史運動史研究会関西部会 休み

■朝鮮近現代史研究会、午後2時～5時 (①金早雪「韓国地域福祉と感染症対策の小史」、②李恵子「『済州・美しさのかなた』(李恵子訳、キンドル版)について」)

会場 ZOOM 参加希望者は、飛田 hida@ksyc.jp まで連絡ください。

【今後の研究会の予定】 7月11日(日)、在日(①福本拓、②安岡健一)、近現代史(休み) / 8月は休み / 8月開催予定の第9回在日朝鮮人史日韓合同研究会は来年に延期です。 / 9月12日(日)、在日(瀬戸徐映里奈)、近現代史(姜健栄「米国アラバマ州の韓人戦争花嫁と Don Lee 牧師」) / 10月10日(日)、在日(未定)、近現代史(未定) / 11月14日(日)、在日<神戸映画資料館で映画会>開催予定、近現代史(休み) / 12月12日(日)、在日(広瀬貞三「戦前の吉野川・一字発電所工事と朝鮮人労働者」)、近現代史(未定)

【月報の巻頭エッセイの予定】 7月号以降の原稿です。締め切りは20日です。梶居佳広、高野昭雄、李裕淑、藤川正夫、張允植、松下佳弘、三宅洋介、金早雪、高希麗、伊地知紀子、川那辺康一、廣瀬陽一、高正子、斎藤正樹、土井浩嗣、上田文夫、中川慎二、塚崎昌之、宇野田尚哉、姜健栄、佐野通夫、三宅美千代、全淑美、太田修、藤永壮、水野直樹、河かおる、本岡拓哉、梁千賀子、山根俊郎、川瀬俊治、小野容照、樋口大祐、梶居佳広、高木伸夫、長志珠絵、藤井幸之助、黒川伊織、吉川絢子、李月順、高祐二、李景珉、青野正明、呉仁濟、勝村誠、松田利彦、飛田雄一(思いつくままにリストアップしました。前倒しで原稿を書いてくださってもOKです。)**【編集後記】** スペースがなくなりました。飛田雄一 hida@ksyc.jp